

吃音の現象学にむけて～ナラティブ・アプローチが開く、どもる人たちの世界～ (2) セルフヘルプ・グループのアイデンティティ

坂本英樹 (どもる子どもの親・教員

・NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト)

はじめに

ある日の大阪吃音教室から

大阪吃音教室は金曜日の夜に大阪市内の会場で前期 20 回、後期 20 回の計 40 回、年間を通して運営されている。久しぶりの参加者の近況報告や初参加者の疑問や質問に答える形で例会は始まっていくが、事前に立てた年間計画に従い、毎回テーマを設定して展開されていくのが特徴である。これはあくまでも私個人の印象ではあるのだが、現時点において今年度一番の盛り上がりを見せた例会は、5 月 8 日の「1 分間スピーチ」だったと思う。

人によって話す、読むスピードはさまざまであろうが、1 分間は原稿用紙 1 枚分、400 字程度の情報量である。そして、400 字はまとまったことを一つ伝えることのできる分量である。テレビ、ラジオが一つのニュースに使う時間は 30 秒から 1 分くらいであるという。つまり、1 分間スピーチは相手に端的に伝えたいことを伝えるための、伝え方や話の要点を整理するアクチュアルな実践なのである。どもる人の中には話すことを苦手と感じ、どもる、どもらないということに意識が集中してしまい、話の内容自体が人に伝わりにくく、乏しくなったという経験をしたこともあるだろう。1 分間スピーチは話の内容自体を磨くことを心がけようというコミュニケーション能力を高めるための例会である。

この例会は吃音に関するテーマとそれ以外の自由なテーマでスピーチが行われることが多いが、この日、選ばれたのは「大阪吃音教室に初めて来た時のこと」という参加しているものの誰もが語ることのできるテーマだった。この例会の存在をどうして知ったのかを語る人、扉を開けて中に入るのに逡巡し時間と勇気を要したことを語る人、初参加時の印象を語る人、いろいろなスピーチがあったが、長らく参加している人の語りの多くは大阪吃音教室との出会いを一つの区切りとして、それ以前の自分と今に至る自分とをつなげて語るという構造を持っていた。大阪吃音教室との出会いがライフストーリー上の絶対的な時間軸となっているのである。

今回の考察のテーマ

実存哲学、生の哲学の系譜に連なるドイツの教育哲学者、オットー・フリードリッヒ・ボルノーは「人間の生が一貫して進行する進歩・発展の道程として流れ行くのではなく、むしろもろもろの区切りによって互いに切断され、その区切りの後で生がその都度一つの新しい出発を始めるところの、相互に異なった諸相を相次いで通過していかなければならないということは、人間の生の本質に属している」⁽²⁾ と述べている。私たちの人生は順接的に流れていくのではなく、一つの区切りであるところのある出来事や出会いを契機として、新たな認識の下にそれまでの人生が省みられ、再構成される。生きなおされていく。その意味で一つの区切りは新たな結節点でもあろう。ボルノーはそれを「新しい始まり」⁽³⁾ と呼ぶ。

大阪吃音教室への参加はどもりに悩む人にとって、「新しい始まり」に成りうる可能性を持つ経験なのではないだろうか。長く参加しているものにとっては、初めての参加者の自己紹介や疑問、質問を聞くことはそこにかつての自分の姿を見ること、そしてそこからの今現在にいたる自分の道程を確認することでもある。私たちは例会に参加するたびにこうしたことを経験しているのである。長らく参加するものの今回のテーマに関するスピーチが同じ構造を持った理由である。

さて、前回の講習会のために準備した考察は、「どもる人たちのアイデンティティ」というものだった。私の考察の終着地点は大阪吃音教室で紡がれてきた「吃音とつき合う」、「吃音肯定」というような言説の意味する

ところをナラティブ・アプローチによって明らかにすることである。それは参加者個人の変容過程を大阪吃音教室の活動を通して明らかにすることでもあるのだが、その基礎作業として、「新しい始まり」に位置すると考えられる「セルフヘルプ・グループ」とはいかなる構造と特徴をもつのか、ということを考えたい。これが今回のテーマとなる。

セルフヘルプ・グループの社会学

セルフヘルプ・グループとは何か

第二回目の吃音講習会の講師であった多文化間臨床心理学の高松里はセルフヘルプ・グループを「同じ悩みや障害を持つ人たちによって作られた小グループのことである。その目的は、自分が抱えている問題を仲間のサポートを受けながら、自分自身で解決あるいは受容していくことにある。問題解決を目指したり社会に対して働きかけるグループもあるが、解決できない問題（障害や死別など）をどう受容していくかを考えるのもセルフヘルプ・グループの大きな特徴である。専門家がグループ開設・維持に協力することはあるが、基本的に本人たちの自主性・自発性が最も重視される」(4)と定義している。

セルフヘルプ・グループ、自助グループ (self-help group) とは、1、仲間との交流に支えられながら「自分自身でその問題に取り組んでいく」(5) ためのコミュニティであること、2、問題を解決するのではなく、むしろ解決できない問題を受容 (6) していく活動を実践していること、3、専門家からは自立した主体的な存在であることの3点の特徴として持っている整理することができるだろう。以下、この3点が意味することについての議論を展開したい。まずは、医療社会学の始まりに位置するタルコット・パーソンズの「病人役割論」を補助線とすることから始めよう。

パーソンズの病人役割論について

パーソンズは「病気になると社会的役割を効果的に遂行することができなくなる」(7)として、病気を学生や社会人が通常求められる役割からの社会的逸脱であると捉え、「病人役割に関する制度化された期待体系には四つの側面がある」という。「第一は、正常な社会的役割の責務の免除であり、そのことはもちろんその病気の性質と重さに呼応している」(8)、「第二・・・は、病人が『力をふるいおこして』決然たる行為や意志の所業によって健康を回復するのを要請されてはいない」(9)という責務の免除である。そして「第三の要素は、『回復』しようとする義務を伴う、それ自体望ましくないものとしての病気の状態」(10)は「かれができるだけ迅速にこの状態から脱出できるのをかれも他我も希望する、この不幸な状態」(11)と定義できるものであること。最後に「第四・・・は、専門的に有能な援助、すなわち・・・医師の援助を求める義務、および回復しようとする過程で医師と協力する義務である」(12)。

小学生の頃、風邪を引いて親から「学校を休んでいい」と言われた時の妙な嬉しさや骨折などによって数ヶ月、入院して職業生活を中断した際に感じた解放感を覚えている人は多いのではないだろうか。この種の解放感とは、病気になったこと自体は何らかの生物学的、身体的な要因によるものであって、本人の振る舞いに責任があるわけではないということを担保されたうえに勉強や仕事、家庭における役割というような社会的義務、責任を免除されたところから生じるものだろう。

こうした病人は何よりも『看護され』なければならない状態」(13)にあり、本人に責任がない以上、確固たる意思を持って治ろうとすることは求められていない、と第一の側面と第二の側面は連動して捉えることができる。そして、病人は自らの状態を否定すべき不幸なものとして受容し、回復の義務を負い、専門家である医師の援助を求め、協力する義務も負っている、というのが第三、第四の側面である。第一、第二の側面は「病人の権利」であり、第三、第四の側面は「病人の義務」と理解することができる。

このパーソンズの病人役割論に対しては従来から多くの批判がある。一つは病気になったこと責任を免除されない病人が存在するという指摘である。アルコールや薬物などの依存症患者は社会的非難の対象となり、「意志の弱い、自己管理ができない人間である」というようなスティグマを貼られることが多いのではないだ

ろうか。また、食習慣等を原因としない糖尿病患者であっても「ぜいたく病」というような誤った認識に基づく偏見にさらされ、生活習慣を批判されることもあるだろう。第二の批判は慢性疾患の患者にはこの病人役割論は当てはまらないというものである。医療の発達等に伴う平均寿命の高まりという今日的な状況は病気を患った後、回復して健康になるか、死かという二元論には収まりきれない「病気だけど病気ではない」(14) 状態とでも呼べる慢性疾患を生きる患者を多く生んでいる。この病気とともに生きる、つきあって生きる人たちにとって、パーソンズの病人役割論は自らの生活実感からは遠いものだろう(15)。

パーソンズの病人役割論という理論モデルは現実の患者の置かれている状況、課題から上記のような批判をすることは可能である。現実との乖離はいくらでも指摘できるだろう。しかし、それは理論モデルゆえの宿命でもある。むしろ、批判が可能という点において、病人と医師、社会との関係を考えるための規範的なモデルとなっているのではないだろうか。半世紀以上も前の理論として廃棄するのではなく、今日的な課題を考察するための理論として鍛えることこそ必要であると考え。セルフヘルプ・グループの特性と構造、そこに集う当事者と、専門家、社会との関係を考察するための準備作業として病人役割論を振り返ったのもそのためである。

パーソンズを越えて一再び「吃音者宣言」から

現代社会学の牽引者、アンソニー・ギデنزはパーソンズの病人役割論を「病人は、病気であることに個人として責任を負わない」(16)、「病人は、通常の実行からの離脱を含め、特定の権利や特権を与えられる」(17)、「病人は医療専門家の診断を受け、『患者』になることに同意した上で、健康の回復に努めなければならない」(18)と解説している。ギデنزはパーソンズの四つの側面を三点に整理しなおしているのである。確かに第三の側面を捨象してもパーソンズの論は十分成立するであろう。パーソンズの記述に従えば、第一と第二の側面が病人役割の中心的な要素であり、第三と第四の側面はそれに付け加えられるべき要素なのである。ギデنزの整理の方がむしろ、パーソンズの真意を伝えているとさえ言えるだろう。しかし、第三の、課題のある現在の状態を望ましくない否定的な事態として受容すべきであるとする側面こそ病人役割論の肝であり、何らかの慢性疾患や嗜癖、障害などの治らない、解決できない問題と向き合おうセルフヘルプ・グループが越えるべき視点なのではないだろうか。

この点を「吃音者宣言」の意味するところから考えよう。どもる人たちが、「長い間、どもりを隠し続けてきた」(19)のは『「どもりは悪いもの、劣ったものという」社会通念』(20)を内面化してきたからであり、それは「自らのことばに嫌悪し、自らの存在への不信を生み、深い悩みの淵へと落ちこんでいった」(21)経験へとつながった。このどもっている、ありのままの私を否定する意識は「どもりは努力すれば治るもの、治すべきもの」(22)という義務感と一体のものであろう。この意識ゆえに、どもる人たちは学生にとっての勉学や社会人としての職業という社会的責務を一時中断してまで数週間から数ヶ月の間、「どもりは治る、治せる」と宣伝する民間吃音矯正所の門をくぐり、そこでの合宿生活を送った。専門家と称する人たちの指導に従い、電車の中での演説というような「度胸を付ける」的な精神修養法や極端にゆっくりと話す発声法や呼吸法に取り組んだ。そして、一時のどもる状態の消失を経験して日常生活に戻った後、またどもり出すという経験をしたのである。その度に自らの治すことに対する熱意と努力不足を責めるという自己否定を繰り返した。どもりを否定する意識はこのように、治すことへと悩む人々を突き動かしていった。青年期の貴重な時間とお金、精神的エネルギーを費やすこととなったのである。

吃音者宣言の「治す努力の否定」という思想は、こうした治すことへの無限の努力をどもりに悩む人たちに生じさせることになる、どもっているありのままの自分を認められないという意識、どもりは劣ったもの、悪いものであり、否定すべきものであるという考え方を否定すること。内なる「正音者」幻想に対する批判であり、それに対する決別の思想なのである。吃音者宣言が乗り越えようとしているのは、パーソンズの病人役割論の第三の側面、課題のある現在の状態を否定的なものとして認識、受容すべきであるという点に他ならない。専門家への依存も人生の責務からの逃避もこの第三の側面から導かれるものなのである。そして、これこそ年間40回、さまざまなアプローチを通して、「吃音とともに豊かに生きる」(23)ことを提唱している大阪吃音教室の根底に流れている思想なのである。

障害学の堀智久は脳性マヒの当事者団体である「青い芝の会」が主張する反優生思想や「内なる健全者幻想」批判の持つ思想性に言及する中で、パーソンズの「第3の役割義務こそが、障害者解放運動がもっとも敵視しなければならない病人役割の中核的要素であると考えられる」(24)と述べているが、それはセルフヘルプ・グループにとっても同様である(25)。

成長するセルフヘルプ・グループ

「吃音者宣言」は伊藤さんたちが言友会を誕生させてから、10年の活動、考察の上に誕生したものである。民間吃音矯正所に通った経験やさまざまな治療と称するものを経験したことある人たちによって設立され、日本吃音矯正会とも名乗っていた設立当初の言友会の目的は吃音を治すことであった。それは日本初のどもり人たちのセルフヘルプ・グループでありながらも、治すことを第一義とすることにおいて、病気の治療、症状の緩和のための情報を収集し、その病気との向き合い方の知恵を共有して、QOL (quality of life=生活の質)の向上を目指す患者会、患者グループ的な性格をもっていたのではないかと想像する。しかし、「どもりと真剣に向き合った」(26)結果、伊藤さんたちは吃音の課題の本質とセルフヘルプ・グループのあり方を掴んだのである。そうして生まれた歴史的な文書が吃音者宣言なのである。

「どもりだからと自分をさげすむことはやめよう。どもりが治ってからの人生を夢みるより、人としての責務を怠っている自分を恥じよう。そして、どもりだからと自分の可能性を閉ざしている硬い殻を打ち破ろう」(27)という高らかな呼びかけは、自分たちのグループの方向性を示したものであり、セルフヘルプ・グループとしての「新しい始まり」を謳ったものなのである。

言友会設立の経過とその後の歩み、特に私たち大阪のグループの来歴を考えると、セルフヘルプ・グループへ参加し、そのメンバーとなることを通して、課題のある個人は変容、成長する。そして、グループ自体も新たな参加者を迎え、そこで紡がれる新たな言説、実践を通して変容、成長していくものであるということが理解できる。私たちはこうした相互作用、ダイナミズムを生きている。それはセルフヘルプ・グループと性格を異にすると考えられる、治らない病気である慢性疾患や原因が不明であったり、有効な治療法が未確立であったりする「難病」の患者会、患者グループにおいても見られる現象である(28)。グループは成長するのである。

患者グループも成長する

患者会は病気とつき合う知恵を共有するという点において、セルフヘルプ・グループと近い性格をもっているのだが、いわゆる「難病」の患者会の場合には患者運動の母体としての性格を強くもつことになる。適切な医療、製薬の開発を専門医や製薬会社に働きかけるためにも、その病気を難病対策として制定される法律記載の指定難病に選定されるように国(厚生労働省)に働きかけることが必要になる。さらには高額な医療費に対する公費助成やQOL向上のための福祉サービスの充実も求めていくことになるだろう。そのためにも広く社会に訴え、国を動かす世論形成を図ることが必要である。患者運動は経済社会と接続するポリティカルな運動なのである。

患者運動はまずは当事者の親によって担われる場合が多い。しかし、当事者が青年となり、患者会のメンバーとして当事者性を発揮してくる段階になると、患者会の性格は大きく変化してくる。患者運動の方向性を問い、よりセルフヘルプ・グループ的な要素を強めることになる。難病を生きる当事者がそれまでの親主体の患者会の活動に対して異議申し立て、問題提起をするのはまさに、我が子が苦しむ病気に対して、社会的関心と呼び起こそうという親主体の運動のあり方、方法論の中に「本来あってはならない状態にある可哀想で無力な子ども」というような、難病を生きる当事者の今のありのまま生を否定するような意識はなかったか、そういう眼差しを親も運動としても持つてはいなかったのかという指摘である。患者運動が内包するパーソンズの病人役割論の第三の側面への批判なのである。この批判を当事者とともに親と会に関わるものが共有するところから、患者会、患者運動は変貌を遂げていく(28)。グループは変容、成長していくものなのであろう。

グループのメンバーになるということ

ストーリーを語る過程

セルフヘルプ・グループは参加者にとって自分のストーリーを安心して語ることができる場である。その語りを通して、参加者はお互いの感情と経験、生活の知恵や価値観、思想の交流を行っている。「わかちあい」と呼ばれるセルフヘルプ・グループのもつ働きである。私は現在、5年近く、ほぼ皆勤に近い状態で大阪吃音教室に通い続けている。毎回の「わかちあい」を体験し、目撃する(29)機会に恵まれている。

大阪吃音教室の毎回の参加者は平均すると20数名である。初参加者は0から多い時では3名程度。一回の参加だけの人、続いて2,3度は参加する人、数ヶ月通った後、参加の途絶える人、年に数度のペースで参加する人。一度参加した後、数年を経て再び参加し、以来一貫して参加している人などいろいろである。また、仕事や家庭の都合、通う距離と時間の問題で会自体にはほとんど参できないが会員となって、会を支えてくれている人たちもいる。金曜日の夜という職場や家族の行事もあるだろうが、参加者の半数近くはほぼ毎日に近いペースで参加している。初めての参加の時からよく発言する人もいれば、半年、1年近く経ってからストーリーを紡ぎ出し、語り出す人もいる。語り出す時期はさまざまだが参加し続ける人たちの語り方にはある共通したスタイルというのか、流儀とでもよべるものがあるように思う。それは参加し続けていく中でそのグループが、自らの課題をどう意味づけ、向き合っているのかを理解し、それを表現するのにふさわしい言葉、思想を自然と身に付けていくからなのであろう。グループとの関わりが深くなるにつれて、語り方を習得していくのである。

ライフストーリー研究のケン・プラマーは自身のストーリーも俎上に乗せて、カミングアウトしたレズビアンやゲイなどの性的マイノリティのセクシュアル・ストーリーや回復したレイブサバイバーのストーリーを通して、個人とコミュニティ、そして社会との相互作用を「ストーリーの社会学」として構想した著作の中で、「ストーリーが語られるとき、私がセクシュアル・ストーリーが語られる一般過程と呼んでいるもの」(30)があるという。それは「1 想像する—視覚化する—感情移入する 2 明確化する—声に出す—公表する 3 アイデンティティを創出する—ストーリーの語り手になる 4 社会的世界/サポート・コミュニティを創造する 5 公的問題の文化を創造する」(31)過程であり、「これは、自己に対して私的にストーリーを語る『内的世界』から、ますます公的な世界へ移っていき、しだいに言論の輪が広がっていく過程としても描くことができる」(32)ものでもある。プラマーが一般過程としている含意は、この過程は性的マイノリティに限られたものではなく、他の課題をもつグループにも適応できるということであろう。

以下では、プラマーの整理をもとに大阪吃音教室に参加する個人の変容過程を辿っていく。それは個人とグループとの相互作用を考察することであり、初参加者がグループのメンバーになったという意識を持ち、グループに貢献する働きをしていく過程である。つまり、「グループのメンバーになる」過程なのである。そしてそれは、なぜ私たちが「親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」というものを手弁当で開催するのか、ということに対する答えともなるだろう。

想像する—視覚化する—感情移入する

自分の課題の名前を知ることはその課題と向き合う第一歩である。名前の知らない、または名前のない課題に私たちは向き合うことはできない。どもりという言葉がマスコミで使われなくなり、また教育現場でもほとんど使われていない現状のせいか、自身の言葉の特徴を「どもり」であると認識していない人もいる。繰り返しや引き伸ばしがほとんど見られず、ブロックが主な特徴である人に時に見られることである。「緊張しているから、言葉が出ないのだろう。でも、もしかして・・・」という思いで、大阪吃音教室に足を運び、どもりと知るという人がいる。

例会では当然のことだが、どもり、吃音という言葉が飛び交う。この言葉に否定的な意識をもち、聞くだけでも抵抗感があるという人にはカルチャーショックを受ける場となるだろう。悩んでいる人たちの集まりであるはずなのに、ユーモアと笑いに満ちている。しかし、真剣な意見、考えが交わされ、率直な自己開示もなされている。どんな仕事につき、いままでにどんな苦勞をしてきた人たちなのだろう。初参加者はいろいろなこ

とを「想像する」。

例会が進行し、テーマに即して次々と参加者の経験が語られるに従い、他者へと向かっていた想像力は自己の内面へと向かうだろう。初参加者にとってこの時間は他者の語りに触発されて、自身の過去の体験を思い出す、心に描く時間となる。ぼんやりとした記憶もあれば、なかには鮮明な映像として現われてくるものもある。「視覚化する」ということである。また、自らのどもる姿は恥しきゆえに直視できないという人であっても、例会はどもりながら話す人を見るという機会である。それは翻って、自分のどもる姿をこれまで他者がどう見ていたのかを模擬実験的に経験することになるはずである。どもる人たちの生き難さの一因はかつてのどもりにまつわる辛い経験とまた同じような体験をするのではないかという想像によってもたらされるのであろうから、この場の経験は膨らんでいくばかりの想像を修正していく機会となるだろう。視覚化することはこのように想像することでもある。こうして目の前で語られるどもり経験に触発されて、自身のどもりにまつわる出来事、経験が記憶の底からたぐりよせられる。それは自身の過去の体験時に感じた羞恥や悲しき等の感情を想起させるものでもある。語る人と自己への「感情移入する」経験である。時に、人の話を聞きながら、または自らの話をしながら涙する人がいるのは、それゆえであろう。

初参加者にとってグループにつながった初期の段階は、同じ課題をもった人と出会えた安堵感とそこで紡がれる語りに共感しながらも、その語りの背景にあるであろうグループのもつ価値観や哲学といったものに対する違和感も持つ時期である。いわば「宙づりの状態」(33)の自己と向き合う時期なのである。参加によって抑圧していた記憶が甦り、再び辛さを体験するかと思えば、逆に解放されたりするような自己の存在が激しく揺さぶられる段階である。

明確化する一声に出す—公表する

大阪吃音教室に参加するようになったからといって、すぐに自己の体験を語れるようになるわけではない。どもりに対して否定的な考えを持ち、どもりという言葉自体も聞きたくない「どもり嫌悪」とでも呼べるような意識を持ち、「宙づり状態」にある場合、また、あまりにも強烈などもりにまつわる悲しかったというような経験をした人も難しいことだろう。そのような辛い出来事はその感情とともに鮮明な映像による記憶として固定される。何かのきっかけで意識に上ったとしても振り返りたくない記憶として、瞬間的に抑圧しようという心理機制が働くだろう。その結果、その出来事のディテールや前後にあったこととのつながり等が曖昧な領域として残されたままになってしまう。それゆえ、強烈な体験であるにもかかわらず、よく分からない、言語化できない経験ということになってしまうのではないだろうか。

ナチスの強制収用所に移送される最中に奇跡的に逃走に成功、戦中、戦後をサバイバルした後、精神科医、作家となったボリス・シリュルニクは自身の経験から「すべてのトラウマは、鮮明なイメージの記憶と、言葉に対する記憶の悪さからなる」(34)という。映像として意識に張り付いた記憶を言語化すること。それはディテールを語ること、図と地を区別し、強烈だが平坦な映像を遠近法的に見ること、記憶された映像のフレームを広げて、もっと広い視野からその出来事を眺めてみること等々である。こうして広がった新たな視界に現われてくるのは、例えばどもるあなたを否定的に見る人ばかりではなかったという、これまでは意識することのなかった事実である。言語化を通して、実践されるのは記憶の修正であり、更新、再構成である。曖昧だった領域を「明確化する」という作業を通して、受け止めきれない強烈な経験は、いつしか受け止められる経験へと修正されるのではないだろうか。シリュルニクもそうしてサバイバルしたのである。

ところで、セルフヘルプ・グループで語られるストーリーには一定の類型があると言われている。「一つは家族の話。・・・うちのお母さんはこうでこうだったみたいな話。二つめに、自助グループにつながってこう助かったという成功体験の話。三つめに、・・・その人に繰り返される、その人のオハコとでもいうような話。自分はこういう状況でいつもこういう失敗をくり返してしまうとか。・・・俺はこういう人との関係は難しいんだといった話」(35)の3パターンである。大阪吃音教室はスピーチ主体の例会運営ではなく、さまざまなテーマを設定した上で、それに即した語りを展開されるところに特徴があるのだが、語られる内容自体はこの3パターンに集約されると言っていいたいだろう。

自己の経験をなかなか言語化できない参加者も、繰り返しこの3パターンからなる語りを聞き続けることで、

自然と自身の経験との比較をしていく、過去の記憶を多角的に見ることを学んでいく。語るための言葉が蓄積されることで、自身の経験が耕されるのである。また、それぞれの参加者の語りが共感を持って、否定されることなく受け止められる場に参加し続けることによって、自身の経験についてもそうであることに確信が持てるようになる。それは場を共にするメンバーに対する仲間意識が育っていく過程でもある。この段階にいたって、いまだ発言していなかった人も「私には伝えるべき言葉、声がある」(36)ということを実感する。「他者の声を聴くことによって私たちは自らの声を聴く」(37) 存在なのである。発見されたのは「自分の声」である。自己を語れないということは声が奪われているということ、サバイバーとは自分の声を取り戻した人のことであろう。

さて、自分の経験を語る、「声に出す」、「公表する」ことは、意識の中でその出来事、経験を反芻することと比べ、より激しい情動を伴う行為である。強い感情が再演されることもあるであろう。しかし、セルフヘルプ・グループはその感情を受け止めるコミュニティである。他の参加者とともに激しい感情を受け止められたということは、仲間の助けをかりて、避けていたことに向き合うことができたということであろう。ストーリー・テラーは語りが仲間に強い共感をもたらしたことにより、自らの声、ナラティブが強い力を持つことに自尊の感情を高めていく。と同時に仲間への信頼も深化していくのである。

アイデンティティを創出する—ストーリーの語り手になる

セルフヘルプ・グループは一般社会に接続している、開かれたコミュニティである。そこでの語りが「公表する」と名付けられる行為であるのもそれゆえである。私的な空間での語りではない。ここで私たちはお互いの経験の公表を通して、電話への対処法のような具体的なものから、人間関係への気づき、吃音の哲学まで実にさまざまなものをグループの中で学んでいく。グループにつながる以前はどこかに治せる方法、機関があるのではないかと思っていた人も、『専門家』と言えども、その守備範囲は意外と狭いこと(38)、つまり何とか室というような限定された場所では有効な方法しか持ち合わせていないこと、「日常生活でどんな工夫をすれば生きやすいかなどは、専門家より当事者の方がよくわかって」(39) いることを知る。当事者こそ、その課題の専門家であること、「人々は自分自身の人生における専門性をもっている」(40) ことを知るのである。長くグループに通うメンバーはそうした知恵と哲学を体現するよき助言者、メンターなのである。

若い参加者はメンターと考えることのできるメンバーの中に、自己の未来の姿を見ることができただろう。大阪吃音教室には10代から、6,70代のメンバーが参加している。吃音の問題を人生のそれぞれの時期の課題として参加者の姿の中に見ていくことが可能なのである。それはセルフヘルプ・グループの中で自分の課題を過去、現在、未来の時間軸に並べて眺めてみることであり、時間にそって自己のストーリーを構成し、語ることで、つまり「アイデンティティを創出する」ことなのである。

私たちは「ストーリーの語り手になる」ことで自らのアイデンティティを創出するのであるが、アイデンティティを明らかにするストーリー、ナラティブにはサブ・ジャンルがあるとプラマーはいう。「苦難を受け、生き残り、克服したストーリー」(41) である。大阪吃音教室に初めて来た時のこと」をテーマにした「1分間スピーチ」が盛り上がったのは当然であろう。長く通うメンバーは大阪吃音教室への参加を軸に自身のストーリーを過去、現在、未来へと紡いでいるのであるから。そしてそのナラティブの形式はこのグループに出会うまでの苦労、ここでの学びを通してのサバイバルと吃音と向き合い、付き合い続けている(42) 日常という、プラマーの整理そのままの構図なのである。私たちにとってこのテーマは大阪吃音教室のメンバーである限り語り続ける、オハコ中のオハコのストーリーなのである。私たちはよき語り手なのだ。

実はこのオハコの話を進化させてくれるのが、初参加や通い出してからまだ日の浅い参加者の発言、語りなのである。とつとつと時間軸も行きつ戻りつしながら話される内容もそこから導き出される意味も十分に整理されていない、アーサー・フランクなら「混沌の語り」と形容すべき発言こそ、語るのに慣れたメンバーにとっては貴重なものとなる。何かについて語るということは他の何かについては語らないということである。ストーリーには常に隠された、まだ語られていないストーリーがある。混沌の語りはそれを想起させ、オルタナティブ・ストーリーへと私たちを誘ってくれるものなのである。常日頃から参加するメンバーは、参加しただけの人の語る内容を通して、自己のストーリーを改めて見つめ直している。新たな角度から、自己の

ストーリーを掘り起こし、語りなおそうとしているのである。アイデンティティは常に再編されていく、生成過程にあるものなのであろう。

社会的世界/サポート・コミュニティを創造する

グループ活動を通して、どもりを否定的に捉えていた意識から解放され、どもりとともに生きるストーリーのシャワーを浴び続け、また自らも語っていく。そんなアイデンティティを構成するストーリーを語れるようになった段階は、自身をそのグループのメンバーであると強く意識できる段階でもあるだろう。

「グループのメンバーになった」と自覚できた参加者が次になすべきことは何か。それは語りの共同体であるこの場を保証すること、その運営に力を尽くすことである。課題のある人たちの「社会的世界」である「サポート・コミュニティを創造する」ことである。つまり、グループに貢献することである。プラマーは「ナラティブが盛んになるには、聞いてもらうコミュニティがなければならず、聞いてもらうコミュニティにとっては、その歴史やアイデンティティや政治をいっしょにつくりあげるストーリーがなければならない」(43)という。私たちは語る存在であると同時に聞く存在でもある。聞いてくれる他者がいないところでナラティブは生まれない。グループには「正しい聴衆が大切になる」(44)のである。正しい聴衆とは、どもりに悩む人たちはよくどもるからといって必ずしも深く悩んでいるわけではないこと、むしろ配偶者にさえも持っていることがわからない状態であっても深く悩む人がいるという、どもる状態とどもりに関する悩みの深さは比例しないというような個人差の大きい吃音の世界の奥深さを知る人のことである。それゆえに、語る人の話を謙虚に聞ける人のことである。そして、語る人からの呼びかけにはいつでも応える用意がある、自らのナラティブを差し出す用意のある人のことである。私たち、正しい聴衆はナラティブが生成する場、アイデンティティが立ち上がる場に居合わせる証人であり、相互作用の中からそれらをともにつくりあげていく共著者なのである。

グループの歴史を知ることも重要な貢献である。大阪吃音教室は40年以上の歴史を持つグループである。一貫した主張、哲学を持ちながらも、食欲にセラピー文化や北海道、浦河の精神障害のある人たちのコミュニティである「べてるの家」の実践から広がった「当事者研究」などの時代の思潮を取り入れてきた。この時代に向き合い続けてきた姿勢は新しい仲間を引き寄せ、また長らく参加するメンバーに新たな視点から吃音を考える機会と刺激を提供してきた。大阪吃音教室で紡がれる言説の変遷は私たちが吃音の課題をどう把握し、何と対峙してきたのかを物語る歴史そのものである。歴史に関心を持つこと、グループの持つストーリーを共有すること、それはグループのアイデンティティ構築に参加することなのである。大阪吃音教室はグループ設立時からのメンバーがいまも参加する、健在な姿を見せてくれるグループである。歴史を体現する、生きた資源といえるメンバーと活動をともにできるということは、後続する世代にとっては幸せなことなのである。

もう一つの重要な貢献は「会費を払うこと」である。大阪吃音教室は例会に参加する人たちだけではなく、いろいろな事情で参加はできないが会の趣旨に賛同し、会費を払う人たちによっても支えられている。例会の参加費だけで会場費や郵送料等はまかなえない。会費として振り込まれるお金が安定した活動を保障するのである。NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト機関紙「新生」に「会費の納入をいただいた皆様」として記載される一人ひとりの名前は例会運営や機関紙の記事の執筆、発送、その他の活動を担うものにとって、無言の励ましであり、エールなのである。

会費は毎月にならせばさしたる金額ではないだろうが、年会費として納入するとなると若い人たちにとっては少し高く感じるかもしれない。しかし、その金額はおそらく友人と一度遊ぶ程度の金額だろう。例会に参加して、何か得るところ、支えられるところがあつたと感じ、機会があればまた参加しようと思うならば、今度は会費納入という形で会を支える番である。セルフヘルプ・グループは互助グループとも訳されるのだが、その意味はこんなところにもあるのである。スーパーやコンビニエンスストアのレジ横の募金箱にお金を入れる人は、そのお金の行方、どこでどのように使われているのかについて関心を持っているのだろうか。私は使われ方に関心を持てるような形、「財布が少し寂しくなるな」というレベルでお金を使うことによって、そのお金が届くコミュニティに対する関心も持続するのではないかと考える。お金を何に、どう使うのかは人生の重要な選択であろう。大阪吃音教室のレクレーションも会員であることの延長に成立している。

さて、セルフヘルプ・グループは安心・安全が担保されたうえで、自らの課題と向き合い、知恵と哲学を学んで生活世界へと接続していく場である。グループ活動に励んでいく中でやがて芽生えていくのは、いまだグループとは出会っていない、かつての自分と同じように自分ひとりの創意工夫で吃音と格闘している、まだ見ぬ他者、仲間への関心である。

公的問題の文化を創造する

吃音は個人差の大きい課題である(45)。前述したように、どもる状態と悩みの大きさは比例しない。悩む点、局面もいろいろである。会社名が電話応対時に出てこないことで悩んでいる人、「お先に失礼します」というような退社時の決まり文句的な挨拶が出てこないことに悩む人、配偶者にどもることを伝えていないことで悩んでいる人、一方でよくどもりながら明るく、積極的に生きている人もいる。「自分と同じ悩みを抱えた人がいる、その気持ちは痛いほど分かる」という思いが、大阪吃音教室初参加時の思いだとすれば、参加回数を重ねる中で広がっていくのは、吃音は個人差が大きい課題であるという、同じだが違うということの発見であろう。参加が継続するかどうかは悩みの大きさ、深さによることもあるだろうが、この個人差の大きい多様な吃音の世界のおもしろさに魅せられてという人も多いのではないだろうか。

例会で取り組む、論理療法や認知行動療法のようなさまざまな心理療法はその日に参加しているある個人の抱える悩ましい問題に焦点を合わせて、その参加者個人が持っている、偏った論理やとらわれ、思い込みを解体していこうという実践である。参加者の多くに共通するとらわれもあれば、その人特有の思い込みもある。それが新たな知見として参加者全員に還元される例会なのだが、例題として勇気を持って自分の問題を提供してくれた参加者の例えば、「どもって情けない」というような『個人的な感情』は、通常は『プライベートな問題』とされることがらだが、そこには社会的抑圧が大きな影を落として(46) いることに私たちは十分、自覚的である。どもる人たちがどもった場面で持つ羞恥や「劣っていると思われる」という意識は社会通念の内面化されたもの、社会的抑圧の結果に他ならない。フェミニズムのいうように「個人的なものは政治的である」。どもりという個人的な問題は社会的抑圧、社会の問題でもある。「一般社会のどもりに対する誤った通念・・・『恥しい』『不自由』『みっともない』『小心』『神経質』などのイメージ」(47) には「明るくより生きる・・・どもりながらもたくましく生き」(48) ることで応えることを宣言したのが、吃音者宣言であったことをこの場で確認しておきたいと思う。

私たちには吃音者宣言の精神を生きること、社会通念に対する対抗文化を生きingことを志向すべきなのである。それを仲間とともに創造することが求められている。「公的問題の文化を創造する」段階へと至っているのである。それは既に今年で連続 26 回目を迎える夏の「吃音親子サマーキャンプ」と今秋 21 回になる「吃音ショートコース」という誇るべき文化として歴史を重ねている活動である。さらに、10 年の時を経て装いも新たに再開し、今回で 4 回目となる「親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会」と昨年度から始め、この 6 月で 3 回を数えた「吃音を考える会」という大阪吃音教室の日曜例会が加わった。そして、その活動の全てのベースにあるのが大阪吃音教室における日常の活動なのである。

さて、以上でプラマーの整理にしたがった、大阪吃音教室徒というセルフヘルプ・グループに参加する個人の変容過程の素描を終えようと思うが、まだ考察しきれていない領域が残っている。大阪吃音教室に通うものにとって、日曜例会は日曜だからこそ参加できるという人と会える機会である。また通常の倍の時間を使った例会は充実度の高いものであろう。吃音シュートコースは二泊三日という長丁場の中、本でしか接する機会のない講師陣と話す機会があり、大阪以外のメンバーとも夜の懇親会を含めて、過ごすことのできる行事、文化である。ここまではグループ活動の延長と理解することができるのだが、サマキャンとこの吃音講習会は大阪吃音教室の例会の延長線上で考えるには、いささか飛躍がありはしないか。もちろん、まだ見ぬ他者、仲間への関心ということで理由付けることもできるだろうが、土日をはさんでいるとはいえ仕事を休み、手弁当で参加する動機、エネルギーはどこからくるのだろうか。

グループのもつレジリエンス

大阪吃音教室の活動に集中していると意識しにくいことだが、少し視線を変えてみるとインターネットの世

界には「吃音治します」という宣伝が踊り、とっくの昔に淘汰されたと思っていたカード式の吃音検査法が高価な値段をつけて出版され、既視感のある海外からの最新の治療法といわれるものが紹介、導入されている。学会もできた。資格ブームも反映してのことだろうが、私の近所のある大学は言語聴覚士養成のコースを新設した(49)。

このような一連の動きに対して私たちは、第1回吃音講習会案内の趣旨において「吃音を生きることを大切にしたいアプローチが少しずつ広がる一方で、依然として吃音の改善がどもる子どもや保護者のニーズだとする提案もなされ、むしろ近年こうした流れが強まっているように思われます」(50)という危機意識を表明している。この認識は「吃音を生きる子どもに同行する教師・言語聴覚士の会」だけでなく、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトのメンバーにも共有されているものである。この危機感がサマキャンのスタッフとなり吃音講習会へ参加することを促しているのだろうか。私はさらに深い動機というか動因があると思っている。

サマキャンにスタッフとして参加するメンバーは大阪吃音教室に長年通うメンバーでもあるのだが、実はこの人たちの多くは自分自身の課題としては吃音はもう大きな問題ではないという人たちなのである。ではなぜ参加するのか。理由は2点ある。一つはスタッフとして親の話し合いや子ども同士の話し合いに参加することで気づき生まれるからである。いま子どもの吃音に悩む親の話はかつての自分の親の姿と重なり、そこで自分の親との時間を越えた対話生まれる。また、たくましくどもりと向き合う子どもの姿は記憶の底に沈んでいた自分のサバイバルを思い出させてくれる。キャンプへの参加はどもるスタッフの新たなナラティブを促してくれるのである。

もうひとつの重要な理由は、自分の存在自体が資源として提供できるという自覚から生じる義務感というか、召命感といったものではないだろうか。どもりに悩む子ども、その親にとって成人のどもるスタッフは未来感覚をもたらしてくれる存在である。職を持ち、さらにはスタッフとしてまで力を尽くしている、社会的責務を果たしている姿は、悩むわが子の未来を予感させる存在である。また、どもる子どもとは接したことがあっても、どもる成人とは接したことのない言語聴覚士にとって、どもる成人と出会うことは自身の経験を高めるうえで有益なものであろう。こうしたことを自覚できる、どもる成人は「呼ばれている」という意識、感覚をもっているのではないだろうか。

他者からの呼びかけに応える(response)能力・可能性(ability)のことを「責任(responsibility)」というが、キャンプや講習会に参加する、どもる成人は親や子ども、言語聴覚士からの呼びかけに応えることができるという呼応可能性に開かれている、その責任を自覚するからこそ、手弁当の参加なのではないだろうか。

今回のテーマであるレジリエンス(resilience)とは「回復する力、苦難に耐えて自分自身を修復する力」(51)のことであるが、精神医学、児童発達からの考察を深め、脆弱性モデルではなくチャレンジ・モデルの提唱をしているS・J・ウォーリンとS・ウォーリンはレジリエンスの構成要因の一つに「モラル」を挙げている。モラルとは「仕えること(serving)、つまり、施設やコミュニティ、そして世界に時間とエネルギーを捧げることによって・・・個人的自己を、人類の自己へとつなげる」(52)ことである。キャンプ、講習会への参加は現在と未来の仲間、他者へと時間とエネルギーを捧げ、仕えること、貢献することなのである。自らのうちにあるモラルゆえに参加しているのである。と同時にこの高いモラルこそ、どもる人たちをこれまでの幾多のどもりにまつわる出来事からサバイバルさせてきたのではないだろうか。そして、大阪吃音教室はそのモラルを鍛える場として機能している。私たちはグループとしてレジリエンスを鍛えているのである。

終わりという「新しい始まり」

「召命」「責任」「モラル」と硬質な表現が続いたが、それらの要素を包んでいるのが「楽しさ」であろう。毎回の大阪吃音教室はもちろんのこと、サマキャンや吃音講習会も楽しいのである。楽しいから都合をつけて参加しているというのが、私の実感に一番近い理由である。この楽しさをレジリエンスの各構成要素と関連させて考察したい気持ちもあるが、それは他日の課題である。

大阪吃音教室終了後は場所を変えて小一時間ほど歓談をするのだが、新たなナラティブと出会った日はいつも増して会話が弾む。心なしか皆の顔も少し上気している。ボルノーは「若返りは、絶えず新たに成就されるべき課題」(53)であるというが、私たちは新たな参加者、ナラティブと出会うことによって常に「新しい始

まり」を迎えている。若返っているのである。楽しいはずである。

<注>

- (1) (2) O・F・ボルノー/西村皓・鈴木謙三訳 1968 (1966)「危機と新しい始まり」 p57
- (3) 高松里 2009「新装版 セルフヘルプ・グループとサポートグループ実施ガイド」金剛出版 p18 (4) 同 2009p19
- (5) 大阪吃音教室では現在は、「受容」という言葉は使わずに、「問題とつき合う」というような表現を使っている。その意味するところについては、具体的な言説分析を通して展開する予定であるので、ここは高松の文章に合わせて「受容」とした。
- (6) パーソンズ/佐藤勉訳 1974 (1951)「社会体系論」 p425
- (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) パーソンズ 1951p432
- (14) 医療人類学の浮ヶ谷幸代の著作名である。2004「病気だけど病気ではないー糖尿病とともに生きる生活世界」誠信書房
- (15) その他の批判として、「回復の義務を裏切る病人がいること」、「通常の治療のコースにのらない病人がいること」が挙げられている。池田光穂 2014「病気になることの意味:タルコット・パーソンズの病人役割の検討を通して」 p9～p13 Osaka University Knowledge Archive: OUKA <http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/>
- (16) (17) (18) アンソニー・ギデンズ/松尾精文他訳 2009 (2006)「社会学 第五版」而立書房 p289
- (19) (20) (21) (22) 伊藤伸二編 1976「吃音者宣言」たいまつ社 p2
- (23) 伊藤さんの本の題名である。伊藤伸二 2013「吃音とともに豊かに生きる」NPO 法人・全国ことばを育む会
- (24) 堀智久 2014「障害学のアイデンティティ」生活書院 p42
- (25) パーソンズはあくまでも病人の役割、機能について言及しているのであって、障害者解放運動やセルフヘルプ・グループを射程に入れているわけではない。議論を展開するにあたって、使える理論モデルとして援用していることは注記しておきたい。堀もこのことには十分に自覚的で「仮想敵としてのパーソンズ」 p41 という表現をしている。
- (26) 「東京正生学院という民間吃音矯正所に入るまでの自分はどもりに深刻に悩んでいたが、どもりに真剣に向き合ってはいなかった」というような発言を最近の伊藤さんはよくする。
- (27) 伊藤伸二編 1976p3
- (28) 例えば、注 (24) の堀智久 2014 には「先天性四肢障害児父母の会」について、北村健太郎 2014「日本の血友病者の歴史」(生活書院)には血友病患者の患者会、患者運動の生成と歴史的経過、そしてその主張の変容が詳細に記述されている。
- (29) 前回の資料にも書いたことだが、私は吃音の課題に向き合う子どもの親という立場で最初、例会に参加した。しかし、大阪吃音教室が持つ場の力と吃音が見せる豊かな世界に魅かれて、すぐに親であるより私自身の課題であると意識して参加するようになった。それは高校教員である私にとって、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクトと日本吃音臨床研究会の紡ぐ実践が教育の営為そのものであると了解できたから。私自身の教員としてのあり方、営みを吃音をプリズムとして考えようとの思いからである。よって、私の例会に臨む姿勢は、一参加者であることを基本としつつも、そこで起きていることの意味づけを考えるというものである。参加しながらの観察、参与観察ということになるであろう。「体験し、目撃する」と書いた理由である。
- (30) ケン・ブラマー/桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳 1998 (1995)「セクシュアル・ストーリーの時代」新曜社 p263 (31) (32) 同 p264
- (33) 春日キスヨ 2011「介護問題の社会学」岩波書店 p238 所収の「セルフヘルプグループと自己回復」には内容はもちろんのことであるが、文献の面でも教えられることが多かった。
- (34) ボリス・シリュルニク/林昌宏訳 2014 (2012)「憎むのでもなく、許すのでもなく」吉田書店 p68
- (35) 上岡陽江・大嶋栄子 2010「その後の不自由」医学書院 p 112
- (36) トム・フーバー監督作品 2010 年 (日本公開は 2011 年) 映画「英国王のスピーチ」におけるコリン・ファース演じる吃音に悩むジョージ 6 世がスピーチセラピストのローグに向かっていう台詞である。私なりに意識した。
- (37) アーサー・W・フランク/鈴木智之 2002 (1995)「傷ついた物語の語り手」ゆみる出版 p47
- (38) (39) 高松里 2009p33
- (40) アリス・モーガン/小森康永・上田牧子訳 2003 (2000)「ナラティヴ・セラピーって何？」金剛出版 p201
- (41) ケン・ブラマー 1998p100
- (42) プラマーの整理に習えばここは「克服」と書くべきところだが、大阪吃音教室で使われる言葉に従って、このように記述した。その意味するところは、次回以降の考察に譲りたい。

- (43) ケン・ブラマー 1998p181 (44) 同 p268
- (45) 伊藤さんは最近、吃音に関する「明確な事実」として、吃音は「1、治っていないという事実 2、治療法がないという事実 3、個人差が大きいという事実」という 3 点に整理して、話を展開することがある。特に従来あまり言及されてこなかったこととして、吃音の悩みとそれが人生に与える影響には「個人差が大きい」ということを強調している。
- (46) 杉野昭博 2007『障害学 理論形成と射程』東京大学出版会 p138
- (47) 伊藤伸二編 1976p14 (48) 同 p3
- (49) このような動向の背景には 2004 年に成立した発達障害者支援法に基づき、翌年に定められた発達障害者支援法施行令第 1 条に「発達障害者支援法（以下「法」という。）第 2 条第 1 項の政令で定める障害は、脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものうち、言語の障害、協調運動の障害その他厚生労働省令で定める障害とする。」と規定されたことや DSM-5、改訂作業中の ICD-10 などの存在がある。このような観点についての検討やそれに先立って考察が必要と思われる、障害学の観点から吃音をどう捉えることができるのか、という点については他日を期したい。
- (50) 渡邊美穂 2012 年 5 月「第 1 回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会のご案内」の趣旨より
- (51) S・J・ウォーリン、S・ウォーリン/奥野光・小森康永訳 2002 (1993)「サバイバーと心の回復」金剛出版 p13 (52) 同 p217
- (53) O・F・ボルノー 1968p77